アートの力で復興支援

地域住民と協力 庭園を計画

アートを通じた復興支援に取り組む。大量の流木が問題となった九州北部豪雨ではクスの流木から半年がかりで竜（高さ約105㌢、幅約105㌢、重さ80㌔）を彫り、発生1年後の今年7月、朝倉市立杷木小学校に寄贈した。流木は「朝倉竜」と名付けられ、子どもたちの「守り神」としてよみがえった。今、豪雨の影響で倒れた添田町の「吉木のヤマザクラ」に新たな命を吹き込む。

クスの木は支援に入った同市内の流木集積所で見つけた。直径約1㍍、樹齢132年。「出合った瞬間、水の守り神、竜が思い浮かんだ。彫らなければと思った」。木の割れ目には小石や砂が入り、チェーンソーを当てると火花が散った。冬場は凍える手を温めながらコツコツとノミを入れた。

「木や森に対する負のイメージを少しでも和らげたい」との思いから流木を使ったが、不安もあった。「『あん時の流木やん』と子供に災害の怖さがよみがえってしまわないか心配した。それだけに『竜のおかげでもう災害が起きない気がする』と言ってもらえたことが何よりうれしい」

8月から取り組むのがヤマザクラを使った座像だ。樹齢300年の古木を「復興のシンボル」にできないかと、町から制作依頼を受けた。日本三大修験山の一つ、添田町の英彦山（1199㍍）で信仰されてきた童子の神様をテーマに彫る。「ひれほどの人がこの桜に心を癒やされたのかと思う。この木に宿る命と祈りを、彫刻の中で生かし続けられたら」と話す。

英彦山山伏の子孫の家に生まれた。「修験道は明治政府によって廃止されたが、自然は神様であり、尊いものとして敬う思想は受け継いでいる」

作品は「個人的な出会いや自分の中にある無言の思い、自然な感覚、経験から感じたことを形にしてきた」。中越地震では新潟県山古志村（現長岡市）に伝わる闘牛をイメージした木彫「山古志の角突き」を制作し、人々を勇気づけた。東日本大震災では原発事故によって取り残された牛たちに「やり場のない痛み」を感じ、彫刻「望郷の牛」を制作した。

一方でボランティア団体「福岡エルフの木」を組織。福島県内の妊婦や母親たちのため、関係施設に糸島産の、熊本地震以降は熊本産の野菜を送る活動は7年目になる。

学内の研究者たちと共に「災害流木再生プロジェクト」を進める。その一つとして朝倉市にある廃校を利用した美術館「共星の里」で、敷地に流れ出た巨大な岩石や流木を生かしたアート庭園「黒川復興ガーデン」を地域住民と一緒に作る計画だ。「人は互いに力を出し合い、共同で何かを創造することで尊厳を回復し、前を向くことができる。それが復興につながると信じたい」と力を込めた。【合田月美】

この人！

九州大大学院芸術工学研究院准教授・彫刻家 知足（ともたり）美加子さん(53)

英彦山の守り神「花開く童子」(右)の制作にあたる知足さん

福岡

福岡本部 〒810-8551 中央区天神1 毎日会館3階
電話092・781・3100 FAX721・6520
fuku-shakaibu@mainichi.co.jp
南支局 092・925・6550 FAX925・6551
東支局 0940・36・3302 FAX 36・3169
西支局 092・781・3100 FAX721・6520

はがき随筆

相棒

先日、赤い車を購入した。運転歴40年近く、6台目の車だ。今までガソリンを入れれば意の向くままに走ると過信していた。車に感謝する切っ掛けは前の車を自損事故で失ったことだ。壊れてしまった車に「本当にゴメンネ」という心境になった。思い入れに欠けていたように思う。車は私の生活になくてはならない相棒である。今の赤い車は危険を察知するとピッピッピーと反応してくれる。「ありがとう、OK！」と会話しながらハンドルを握っている。華やいだ色は私の年に不釣り合いだと思うが、結構気に入っている。80歳まで相棒ヨロシクネ。

志免町向ケ丘 中崎栄恵(72)

2018.10.22